「アデニウム」日本名「砂漠のバラ」

12月9日
アート理容室（成清孝一代表）に咲いていました。40年ほど大切にして、今回も立派に咲いています。アデニウム・砂漠のバラです。花言葉は「一目惚れ」。

ティタイム

「光陰矢のごとし」

新得町役場屈足支所長　中村　吉克

年の瀬を迎え、あわただしい日々を送っておられると思いますが、みなさん今年はどんな年でしたか。
光陰矢のごとし（月日が経つのが早いので無為に送るべきでない）と言われますが、充実した1年でしたか。
自分自身も年を重ねるごとに1年経つのが早く感じ、諺の意味を重く感じる今日この頃です。
また、来年元号が変わるので、あらゆるところで「平成最後の……」と使われて感傷的になってしまいます。
私事ですが、生まれたのが一九五九年ですから、昭和と平成で30年ずつ生きたことになります。
自分にとって平成の30年間は世に言う働き盛りの年齢でした。
泥臭くアナログ的な昭和からスマートでデジタル化した平成と変わり、日進月歩で便利になった半面、人と人のつながりが希薄になったといわれますが、平成とはどんな時代だったんでしょうか。
消費税導入、ソ連邦崩壊、雲仙普賢岳噴火、阪神淡路大震災、オウム事件、同時多発テロ、イラク戦争、東日本大震災、原発事故、豪雨被害等々オリンピックやノーベル賞受賞など明るい話題もありましたが、どうしても事件や戦争、災害などが先に思い浮かびます。
平成の意味は「内外とも平和が達成される」との意味ですが、願いだけではなかなか実現できないものですね。
ただ、世の中がどう変わっても人と人がつながり合うことが、幸せだったり喜びだったりを感じるんでしょうね。
来年も色々な出来事があると思いますが、まずは自分の身近から笑顔を作っていきたいものです。
来年もみなさまにとって健康で良い年でありますように。

こちら屈足駐在所

Ｎｏ30

鈴木進司　巡査部長

「停止距離について」
停止距離とは、ブレーキを踏んでから車が完全停止するまでの距離をいいます。
乾燥路面を時速40キロメートルで走行していた場合の停止距離は22メートルとなり、時速60キロメートルで走行していた場合の停止距離は44メートルとされています。
圧雪路面（雪が積もっている状態の路面）だと、停止距離が乾燥時の3倍以上になるとされます。
そして凍結路面だと5倍以上になるとされています。
時速40メートルだと約120メートル、時速60キロメートルだと約240メートルです。
これらは、あくまでデータ上ことなのでが只、屈足地区で発生する冬季交通事故のほとんどがスリップによって、電柱やガードレールなどの道路構造物にぶつかる単独事故ですので、これら停止距離などを参考に道路の路面状況に合わせた走行や、早めのブレーキを心掛けて交通事故防止に努めて下さい。

本

送料無料

当販売所では様々なジャンルの書籍、雑誌、文庫、新書、週刊誌の定期購読など、ほとんど全ての出版物を確実にお取り寄せします。
今読みたい話題作！欲しい本をお取り寄せ！
気軽にお問い合わせください。
通販は送料がかかりますが当販売所は無料です。
※当店取り置きとなります。宅配サービスは致しません。

道新十二月号ポケットブックの御案内です。

▼ポケットブック12月号―変身スイーツ
お菓子作りは多くの工程があり、時間がかかります。また、材料もいろいろ用意しなければなりません。それらを少しでも省けたら、もっと手軽に作れるようになるのではないでしょうか。本誌では、すでに完成している食品やパイシートなどの半製品を使ったお菓子作りを紹介します。名付けて「変身スイーツ」です。ぜひ、家族や友だちと一緒に作ってみてください。
配布済み。

ポケットブック次号予告
「食べやすい料理」です。
お楽しみに。

ねっとわーく屈足　検索

ねっとわーく屈足電子版
ミニコミ紙「ねっとわーく屈足」が、パソコンやスマートフォンで動画も閲覧できます。
ツイッターも屈足の話題一杯毎日更新！

じじーakira1942　検索

連続小説

加奈子

赤池　武臣

食うため、加奈子はホステスを選んだ。
だがここでも無垢（むく）な加奈子にとって男は一群の獣でしかなかった。
そんな時、父親ほど歳の違う男だけは加奈子に親切だった。
加奈子は若さだけをひとつの武器とし、その男の後添いにおさまった。
足掛け十年、子供こそなかったが、女として漸（ようや）く花開き、幸福の絶頂にたった時、またしても加奈子を不幸が襲った。
あっけない夫の死である。
その時から加奈子は女を捨てた。
夫の残してくれた全財産をはたき、帯広郊外に三軒の下宿屋を次々と建てていった。
昭和四十年、秋の事である。
五時に合わせた時計のベルがけたたましくなった。
加奈子の一日の始まりだ。
この繰り返しはもう十何年続いている。
その間、いろんな事があった。
それにしても…と加奈子は思う。
何人か後に今働いている時子の事だ。
一番古いこの下宿は高校が近いという事もあって、新聞にチラシを入れた当時から入居者が減った事はない。
食堂を中央に据え両側に羽根を広げたように建てた二階建ての部屋は全部で四十を数える。
その部屋の一つに時子と子供二人が住んでいる。
上が中学一年で下が小学四年である。
「時さん起きてよ」
炊事場に向かう時、時子に声をかけるのも加奈子の日課だ。夏場はさほど苦にならない炊事場だが、冬場は骨身にこたえる。
ややあって時子が酔いの抜け切らぬ顔でスリッパを引きずりながら流しの前に立ち、うまそうに咽喉（のど）を鳴らしコップの水を。飲む。
「昨夜もまた飲んだの、飲むのは構わないけど、もう少し自分の駱（からだ）のことも考えてよ。子供の手前もあることだし…」
時子は返事をしない。流しに溜めてある桶水を荒々しく開ける。
勢い余った水が流しの緑から音を立ててこぼれた。
（あの男を何とかして追い出さねば）　と加奈子は思う。

つづく